

# オットー・バウアーとオーストロ・マルクス主義

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上条, 勇, Kamijo, Isamu メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00000400">https://doi.org/10.24517/00000400</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## オットー・バウアーと

## オーストロ・マルクス主義

## 〔報告〕 上 条 勇

先頃ソ連で保守派のクーデターが失敗しましたが、その後の動きを見るにつけ、私は、ロシア革命以来の社会主義の実験の歴史が、一応幕を閉じつつあるという思いを抱かざるをえませんでした。ソ連・東欧諸国の将来がどうなるかはまだわかりませんが、これらの国が社会主義に向けて歴史のイニシアティブをとることは、もはやないのでありますまいか。私は、これに関連して、歴史の過渡期の見通しについて考え直す必要を感じています。歴史の過渡期を引っ張っていくのは、やはり先進資本主義国である。これからは先進資本主義国における社会福祉国家の歩みが注目され、これとのかかわりで、社会主義とはいったい何か、改めて考え直されていくと思われまふ。私は、マルクスの唯物史観からすれば、我々がこれまで随分わき道にそれてきたような気がするのですが、これからは、唯物史観の当否が、本当に試される時代となると考えています。今日は、

以上のことを念頭におき、バウアーとオーストロ・マルクス主義について報告します。

本論に入るにあたって、私は、まず、戦間期に左翼社会民主主義という独自の国際的な潮流があり、これを代表したのが、オーストロ・マルクス主義であったということを強調しておきます。一つ断っておきますが、この報告では、私は、バウアーを最高指導者とする戦間期オーストリアの労働・社会主義運動とその路線という意味で、オーストロ・マルクス主義という言葉を用いることにします。バウアー自身は、オーストロ・マルクス主義とは、改良的現実主義と革命的理想主義の一つの思想に統一するものであると特徴づけています。彼の特徴づけを受けて、この報告では、オーストロ・マルクス主義における改良的現実主義と革命的理想主義の統一の問題を中心に考察することにします。

— 周知のように、一九二六年にオーストリア社会民主党は、リント綱領を採用しました。この綱領は、オーストロ・マルクス主義の路線と思想を集約したものと考えられるので、この報告でもそのエッセンスをとりあえず紹介しておきます。

リント綱領は、議会制民主主義を通して労働者階級が政治権力を掌握する道を明確にうたい、いわば「合法的議会制民主主義的変革路線」を確定したものであるといえます。この点、一九二三年の国民議会選挙でオーストリア社会民主党は、三九・六%の得票率をあげ、昇り調子であることを示しました。バウアー達は、選挙を通じて後もう少しで政治権力を獲得できると

当時期待しており、かなりリアルに権力への道を提起したと考  
えられます。リンツ綱領は、「多数者革命」の観点に立ち、国民  
の支持を集めるために当時考えうる、あらゆることを斟酌して  
います。たとえば、宗教の自由の要求、小農保護政策、プロレ  
タリアートのヘゲモニーという考え、連合政権の問題などが挙  
げられます。その他に、リンツ綱領は、労働者政権の成立に対  
しては、資本家階級が暴力的に抵抗する可能性があるという考  
えを述べ、この場合には、「独裁の手段」によって抵抗を鎮圧す  
ると主張しています。これは、いわゆる「プロレタリア独裁」  
の問題とのかかわりで議論されており、当時のオーストリアで  
物議を醸し出しています。

私は、ここで、リンツ綱領で「当面の任務」という章の後に、  
「資本主義社会体制から社会主義社会体制への移行」という章が  
設けられていることに特に注目したいとおもいます。つまり、  
そこでは、当面の行動綱領と並んで過渡期綱領が提起され、政  
治権力を掌握したら、どういうやり方で社会主義を実現するか  
が具体的かつ明確に述べられています。その意味で、リンツ綱  
領は、いわゆる先進国革命の具体的構想を先駆的に提起したも  
のとして、積極的に評価されるのではないのでしょうか？この  
点、リンツ綱領における行動綱領と過渡期綱領の関係を深く検  
討する必要があります。

まず行動綱領についていえば、その諸要求は、社会民主党が  
政権獲得以前から追求すべき社会改良を内容としています。も  
ちろん社会改良といっても、資本主義の構造的改革に結びつく、

かなり突っ込んだ要求がそこに見られます。たとえば、経済民  
主主義の要求がそうであり、ここでは、労資の共同決定権、つ  
まり経営協議会とか労働会議所を通じた労働者の権利の拡充が  
うたわれています。いうまでもなくこの労資の共同決定権は、  
今日の西ドイツ型、オーストリア型の社会福祉国家の不可欠の  
構成部分をなしていますが、もともとは戦間期のドイツ、オー  
ストリアの労働運動の成果として形成されたものです。リンツ  
綱領の行動綱領をみると、そこで掲げられた様々な要求には、  
社会主義の方向に向けて少しでも資本主義を構造的に改革して  
行こうという意気込みがみられます。

もちろん、リンツ綱領のなかで、パウアーは、改良を通して  
なし崩し的に社会主義を実現できるとは考えていず、このよう  
な考えを改良主義として強く否定していました。そして、革命  
的理想主義を提起し、労働者階級が政権を獲得した後に具体的  
に社会主義を建設していくプランを提出しています。

リンツ綱領の過渡期構想で社会主義建設論の根幹をなしてい  
るのは、いわゆる社会化論です。かつて第一次大戦を契機にし  
てオーストリア革命が生じたのですが、社会化論は、この時に  
パウアーが提起したものです。それは、三者管理すなわち生産  
者、消費者、国家の代表の管理からなる「共同経済公社」の形  
成によつて社会主義の実現を目指したものであり、ほぼそのま  
まりリンツ綱領における過渡期構想に継承されています。過渡期  
構想では、パウアーが社会革命を非常に長いタイム・スパンで  
考えていたことが特に注目されます。戦間期に彼は、繰り返し、

政治的革命は一撃にして成就される。それに対して社会革命は、有機的・進化的・長期的な過程であり、労働者政権下での社会化過程といえども長期的・漸次的なプロセスであると述べています。彼によれば、労働者政権が成立して、国有化を実施したとしても、それだけでは、「形式的社会化」をなすにすぎない。重要なのは、生産過程の中身、経済の管理・運営の仕方を変へることである。パウアーは、このことを「実質的社会化」と呼び、こう述べています。

すなわち、社会主義は、政治と経済の過程で労働者の自治を実現し、自由と民主主義を完成させるものである。計画経済と労働者の自治を実現するためには、資本主義の一定の経済的成熟が必要であり、大企業の支配的な産業部門から徐々に社会化を実施するより他にはない。社会化に当面向かない産業部門については、組織化を促進する措置がとられる。

以上の考えは、今日における先進国革命論とかなり共通した見解を述べたものであると言えます。私は、ここで、その特別な意義を強調するより、むしろ、それがパウアーの独特の歴史観と過渡期構想に導かれていたことを強調したいと思います。この点、一九二三年のパウアーの著者『オーストリア革命』から、一節を抜き出しておきましょう。

「人類は封建制から資本主義に移行するとき、次々と生起する一連の長い革命的過程を経なければならなかった。この革命的過程では、国家的・社会的生活のいろいろな過渡的形態が形成され、つづく革命的過程でふたたび克服され、より高次の過渡的形態への

移行がなされた。一三世紀の純粹の封建国家から一九世紀の純粹のブルジョワ国家への道は、……非常に多様な過渡的諸形態を経たのである。これと同様に、資本主義から社会主義への途上で、人類は、一連の長い革命的過程を経、国家と社会の一連の過渡的諸形態を経なければならぬ。」

パウアーは、また、別の著書で、「過渡期の経済制度では、資本主義的諸要素と社会主義的諸要素が混合されている」とも述べています。そして、リンツ綱領報告では、綱領の新しい特徴として、社会化企業と資本主義企業が競合する社会の過渡的諸形態を想定したことに注意を促しています。

パウアーの以上の考えは、結局、資本主義から社会主義への歴史的過渡期において、いわば中間的諸形態ないし混合経済体制の形成を想定したものです。パウアーのこの考えからすれば、北欧・西欧の社会福祉国家は、過渡期における中間的諸形態の一つをなしていると思われまふ。

こう考えると、オーストロ・マルクス主義における改良的現実主義と革命的理想主義の統一について、一つの明確な実像が思い浮かんできます。つまり、私は、パウアーにあつては、社会主義的変革は二段構えに構成されていたと理解しています。つまり、彼は、一方では、政治権力を掌握する前から、社会諸

改良を通じた資本主義の漸次的な改革を追求し、これを通して、できる範囲で資本主義の漸次的な社会主義化を達成するという目標を立てていた。他方では、社会主義の成立のためには、歴史の一定の飛躍的な局面が前提となると考え、政治権力の獲得

を通して大規模な社会化（社会主義化）過程を実施する構想を抱いていた。いずれの場合であっても、彼にあっては、資本主義から社会主義への長期的有機的な変革過程の一環をなしており、とりわけ個々の社会諸改良は、資本主義に「部分的な社会主義」とか「社会主義的要素」を織り込むものとして、積極的に位置づけられていたと言えます。

先進国革命に関するこの二段構えの構想は、バウアーが明確に定式化していないこともあり、これまでなかなか理解されてこなかったと言えます。たとえば、これまで、次のようなバウアー批判さえ投げかけられています。つまり、バウアーはマルクス主義の教条主義に立つて、資本主義の崩壊を待ち望んだのであり、いわゆる「待機主義」に陥った。その結果、彼は、政治的対立を極端なまでに煽る一方で、改良活動を軽視した、と。これまでの説明からわかるように、このバウアー批判は、まったく根も葉もないものです。

実際には、バウアーは、戦間期には社会民主党議員団を率いて、議会で社会諸改良のために熾烈な闘争を繰り広げたのであり、また、革新自治体ウィーンの「社会主義」的租税・財政政策の成果をたたえています。翻ってみると、当時、ドイツではヒルファディングやナフタリらが、経済民主主義論を唱えており、様々な改良を通して資本主義を社会主義に漸次的に改革していくという構想を提起しています。バウアーにも、ヒルファディングらとかなり共通する考えがあったと言えます。

小括すると、バウアーの社会変革論は、「過渡期における中間

的社会形態」論に基づき、二段構えの形で改良的現実主義と革命的理想主義を統一するものであったと言えます。私は、この社会変革論を掲げたバウアーとオーストロ・マルクス主義が、なぜ時々悪しざまに言われるのか、なかなか理解できないのですが、この点、やはり彼らがファシズムに敗北した事実が影響していると思われます。そこで、以下、バウアーとオーストロ・マルクス主義の悲劇を述べたいと思います。

この点、まず、バウアーには、外国への経済的依存度が高いオーストリアのような小国では、社会主義革命が単独では可能でないという考えがあったことを確認しておかなければなりません。バウアーは、小国オーストリアの社会主義運動には、単独のままでは越えがたい制限があると思ひ、一方では、社会主義を実現する上での前提として、ドイツへのオーストリアのアンシュルス（合体）を政策的に追求し続けました。他方では、アンシュルスがフランスの強硬な反対に出会っていたので、アンシュルスを可能とするようなヨーロッパの勢力諸関係の変動の時期の到来を待望しています。

これは、バウアーの具体的な戦略的構想とかかわっています。彼は、長期的な展望として、全ヨーロッパ・レベールで諸階級の力関係の変動と社会革命の時期が必ず来ると見ています。

彼によれば、第一次大戦の戦後処理の誤まりは、資本主義世界に不安定な要因を生み出した。さらに、ヨーロッパは、安定化の時期を迎えたとしても高度な繁栄を体験することはない。ヨーロッパ諸国の労働運動も戦前とは比較にならないほど強化し

ている。議会制民主主義を通してヨーロッパの有力国で労働者政権が樹立されるのも夢ではない。このことから、全ヨーロッパで革命的変動期が生ずることが将来に予測され、オーストリアの社会主義革命にとって国際的な環境が整う。この時がくるまで、パウアーは、オーストリアで社会主義の準備をできるだけしておこうと考えたのですが、戦間期の現実、パウアーの期待を大幅に裏切っています。

まず、オーストリアの政治的状况について見てみると、強大な社会民主党と労働運動に対して、オーストリアのブルジョア諸勢力は大同団結し、対決姿勢を示しています。その結果、国政レベルでは、パウアーらは、そもそも改良的現実主義を思うようには貫けなかつたと言えます。ブルジョア諸勢力は、社会民主党の尽力によって形成された議会制民主主義を尊重せず、そればかりかファシスト団体を助成し、労働運動にけしかけています。ブルジョア諸勢力のこの反動的な姿勢は、パウアーのマルクス主義的用語に刺激されて生じたというより、ハプスブルク帝国崩壊後のオーストリアの政治的特殊事情や国際事情にその深い原因があつたと思われまゝ。

歴史的経過から言うと、一九二七年七月以来、ファシスト団体の攻勢が強まり、パウアーらは、完全に守勢にまわり、ついには、一九三〇年代不況とファシズムの波に直面していきます。パウアーは、前述のように、ヨーロッパ・レベルで勢力諸関係が変動する時期の到来を期待したのですが、この夢は破れ、逆に、ファシズムの嵐が吹き荒れていきます。彼は、このような

事態に直面して、次のような考えを抱くにいたっています。

すなわち、組織労働運動は、資本主義の経済的繁栄の時期に強化し、反対に経済的停滞と不況の時期には、革命が起きないとすれば弱体化する。また、革命が可能でないかぎり、資本主義の危機は、資本の反攻の機会となり、ファシズムへの誘因となる。労働者階級は防衛にかられ、生活防衛のために資本主義の経済再健を強いられる。

パウアーらは、結局、守勢に追い込まれたまま、ついには敗北の道をたどっていきます。この事実、パウアーとオーストロ・マルクス主義の破産を示すものであつたのでしょうか？この点、確かにパウアー自身も認めるような反ファシズムの個別戦術の誤りがあつたし、あるいは彼の軍事政策の欠陥も指摘することもできます。が、これは、本質的なことではなく、オーストロ・マルクス主義の敗北は、一九三〇年代不況とファシズムの嵐が吹き荒れたヨーロッパ全体の歴史的悲劇の脈絡のなかで捉えなければなりません。小国のオーストリアは、イタリアのファシズムとドイツのナチズムに挟まれ、その影響をもちに受けなければならなかつた。パウアーらの反ファシズムの戦いは、国内に視野を限定できなかつた。私は、適当な時期にパウアーらが武装蜂起によつてオーストロ・ファシズムを打倒し、労働者政権を樹立したとしても、当時のヨーロッパでそれが生き延びえたかどうか、疑問に思っています。

結論的に言えば、改良的現実主義と革命的理想主義の統一を目指したオーストロ・マルクス主義の構想は、先進国の社会変

革路線として重要な問題提起を含んでいたが、戦間期のオーストリアとヨーロッパの政治的現実に突き当たり、十分に貫かれることがなかった。ここにパウアーとオーストロ・マルクス主義の歴史的悲劇があつたと言えます。

### 上条勇氏の報告にたいする質疑

保住敏彦(愛知大学) ①唯物史観の当否が本当に確かめられるとはどういうことか? ②パウアーにあたって経済政策の問題はどう考えられていたか?

三島憲一(大阪大学) ①ナチスに対してグリューネ・ペストともいべきオーストロ・ファシズムがアンシュルスに反対していたことを考えると、パウアーの経済的アンシュルス論は、一般選挙民に誤解され、警戒されていたのではないか?

②SPÖの妥協姿勢に対して左派インテリから批判があつたが、彼らに対するパウアーによる知的反論はあつたか? ③第三世界などの国際的な枠組についてパウアーはどう考えていたか?

伊藤成彦(中央大学) ①戦期間におけるコミンターン、KPÖに対するSKÖの対応はどうであつたか? ②第二次大戦後のクライスキー政権の政策は、パウアーの政策を一定実現するものと考えていいか?

## 自由論題 2

### 一九世紀末オーストリアの

### 哲学的価値論

〔報告〕 直江清隆

価値に対する問いは、狭く道徳哲学の問題に縮減されるものではなく、法や経済などさまざまな社会的実践やそれらに関する諸科学にとつての問いでもある。哲学の眼差しが根源的な経験の次元へと向けられるのならば、哲学的価値論において主題化されるのはそうした実践や科学が前提とする価値と価値づけ作用一般であることになる。

以下でとりあげるのはF・ブレンターノを鼻祖とし、エーレンフェルス、マイノング、クラウスらを代表とするブレンターノ学派の哲学的価値論である。よく知られたように、彼らの価値論は当時同じくヴィーンで展開されたメンガー、ベム・パヴェルク、ヴィザーら限界効用学派の経済学とのかかわり合いのうちで構想されたものであり(それゆえ後者を「オーストリア学派」の「第一の学派」、前者を「第二の学派」とよぶ場合もある)、また議論の核心を「志向性」に求める点で、のちの現象学に連な